

インドネシアと日本の小学校体育科の比較

—— 授業観察とヒアリングを通じて ——

前在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校 教諭
大阪府大阪市立九条南小学校 教諭 柳井友裕

キーワード：小学校、体育科、インドネシアと日本の授業比較

1. はじめに

バンドン日本人学校は、小中学部合わせても13人（小学部9人、中学部4人、平成27年度）の小規模校である。教科担当制で、体育科については、小学部1年～4年、小学部5年～中学部3年のグループに分かれる複式での授業となる。少人数（大体6、7人）の発達段階の異なる集団で、また日本と異なる環境（例えば、体育館がない）で、教育効果を上げていくためには様々な工夫が必要である。

一般的なインドネシアの学校は、狭い校庭、さらに校庭はコンクリート。体育用具においてもボールくらいのもしかない。そのような制限された環境の中で、インドネシアの体育教育は行われている。

インドネシアの小学校にある制限された中で生まれた工夫こそが、現在あるバンドン日本人学校の体育科教育が抱える課題の改善につながり、さらには、帰任後の自分自身の体育科授業の改善につながると考えた。

2. インドネシアの教育システムとヒドゥップバル校について

インドネシアの教育システムは、TK（Tempat Kindergarten：幼稚園）、SD（Sekolah Dasar：小学校）、SMP（Sekolah Menengah Pertama：中学校）、SMA（Sekolah Menengah Atas：普通高校）SMK（Sekolah Menengah Kejuruan：技能系高校）Universitas（大学）STBA（Sekolah Tinggi Bahasa Asing：外国語高等専門学校）となっている。

Sekolah Keristin Hidup Baru（ヒドゥップバル校）は、バンドン日本人学校の前にある、幼稚園から高校までの園児・児童・生徒が通うキリスト教系の私立学校である。インドネシアは、多民族国家であり、住民の大多数は、イスラム教を信奉する人たちであるが、中華系、韓国系、また、パプアやスラウェシなどの地域に住む人々の多くは、キリスト教を信奉する。その他仏教や土着の宗教を信仰する人たちもいる。個人のIDカードにも、信奉する宗教を記載する欄があり、必ずどれかに所属するようになっているようである。教育活動の中にも宗教教育があり、そのためイスラム系の学校とキリスト教系の学校といったように信奉する宗教に対応した形で学校が存在する。ヒドゥップバルは、キリスト教系の学校であり、通う子どもたちの様子を眺めていると、中国、韓国、パプア系の子どもの多く、欧米系の顔をした子どもも確認された。

小学校は6学年あり、それぞれ1クラスずつ10名以下の少人数での構成となっている。昔はもっとたくさんいたようであるが、現在はそのような人数構成となっているようだ。

3. 授業の実態（訪問記録）

【1回目】

○日時：平成27年11月2日（月）午前8時～9時30分

○訪問先：ヒドゥップバル校校長、トノ先生（本校からは、櫻田校長と柳井、通訳のTikaの3人で訪問）

○ヒアリング内容

・カリキュラムについて

インドネシア教育省から、2013年に新しいカリキュラムが提示された。それに合わせて、教科書も支給されている。教師用のものもある。

日本の指導要領の改訂が10年のスパンでされているようには、インドネシアでは改定がされていない。特に

期間が決まっているわけではない。また、地域によって導入される時間にズレがある。その原因として、地域の設備面の違い（例えば、インフラの未整備、通信設備、道路など）が島によって様々だから。ジャワ島はある程度整っているのですが、その心配はないが、インドネシアにある多くの島の中では、インフラ面での差が大きい。

体育科で前カリキュラムと、2013年カリキュラムで変わったところは、動きが増えたことが挙げられる。以前の体育科の授業では、ウォームアップと言え、ストレッチが主流であったが、現在は、遊びの中で様々な動きを取り入れて行うようになってきたとのこと。

○授業について

小学校1、2年生合同（計17名）

活動内容	○日本との相違点 △気づいた改善点
<p>1 コーンでサークルを作り、その周りを様々な動きで回る。先生の指令が4つあり、回っている間に指令が出るとすぐに動くゲーム。</p> <p>工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーンを回るときの動きが、 歩く→少し早く歩く→走る→早く走る→スキップ→うさぎとバリエーションをつけていたこと。 ・回る方向を時計回り、反時計回りと体の使い方が偏らないようにまわり方を両方行っていたこと。 ・途中で指令を入れることで、子どもたちが気持ちの切り替えができるので効果的であった。 <p>指令の中身としては、校舎の壁を触ってくる、車にタッチしてくる。など</p>	<p>○ゲームの中で、様々な動きを身に付ける意図が見られた。日本の「体づくり運動」領域に位置づけられる。</p> <p>○インドネシアでも、単純な動きを単調に繰り返すのではなく、ゲームの中で楽しく身に付ける工夫があり、これは日本の体育の流れとも合致する点である。</p>  <p>円をくるくる回る児童</p>
<p>2 円になり、手をつないで内側を向く。そして鬼が一人いて、言葉を発する（何かを。意味はつかめず）そうすると一人がその円から外れ、鬼から逃げて1周して円の中に入ればセーフ。というゲーム</p>	<p>△基本的に運動している人が2人のみになっていることが、改善の余地がある。</p>
<p>3 日本でいう「言うこと一緒、やること一緒」。先生の指示に従って前後左右に動く。失敗すると列から外れ、応援するのみ。</p>  <p>初めは全員でスタート</p>  <p>最後まで残った児童2人</p>	<p>○日本で行われているままの姿が見られ、驚いた。ただし、バリエーションは、言うこと一緒、やること一緒のみで、日本のように「言うこと一緒、やること反対」「言うこと反対、やること反対」「言うこと反対、やること一緒」はないとのことであった。</p> <p>△これも、失敗した子は抜けていく仕組みで、初めに失敗した子は練習する機会を失うやり方となっていたのが残念。</p>

○考察

- ・ 授業全体を通して、児童の意欲の高さは途切れることなく継続されていた。2013年度版のカリキュラムの改訂により、より多くの動きをゲームを通じて身に付けているように改善されていることによるものだと考える。また、トノ先生が明確な狙いの中で、低学年児童に合った動きをゲームを活用して授業を構築している成果だとも感じた。
- ・ 全体を通じて、下手な子は外に出るというシステムが取られていた。これだと、うまい子は試技の機会を多く得て、最も試技を行うべき子ができないということになってしまう。その点は、改善が必要だと感じた。
- ・ 日本と全く同じ運動があることに驚いた。どちらが先ということではないが、世界共通のものがあるのだろう。

【2回目】

○日 時：平成27年11月6日（金）午前7時～8時

○訪問先：トノ先生

○授業

小学3、4年生14名

活動内容	日本との相違点
<p>1 ウォーミングアップに、日本でいう「りすときこり」のような指定された人数が集まるゲーム。立って家になる人と、その下に集まる人の数を教師が言うと、それに応じて集まる。</p>	 <p>家が2人、人が5人</p>
<p>2 いわゆる「手つなぎ鬼」バレーボールコート大の広さの中で、手つなぎ鬼を行う。</p>  <p>鬼が連なって、残った子を追い詰める</p>  <p>パス&ランを意識つける</p>	<p>○日本と異なる点は、人数が増えてもわかれず、どんどん人数が増えていく点。コートも狭いので、何か最終的には波にのまれるようにつかまっていた。</p> <p>○日本でもそうだが、まずはボールになれる練習を行っていた。これについては、何かゲーム的な要素は見当たらなかった。</p> <p>△アウトナンバーや、タスクゲーム的なものもなく、パスをつなげてゴールを目指すというものであった。なので、なかなか得点は入らず、スペースを意識した動きも見られなかった。</p>
<p>3 パスゲーム</p> <p>①対面パス</p> <p>②ゲーム</p> <p>5人対5人のゲーム。ゴールラインに一人立っていて、その人がボールをキャッチすれば得点。</p> <p>工夫</p> <p>日本のポートボールだと、ゴールにいる子は動けないが、ラインマン的な扱いにしたことで、ゴールマンもボールや相手の位置関係を考えての動きが見られた。</p>	

○考察

- ・ 日本と同じくゲーム領域については、パスゲームを中心としたものから、高学年に上がっていくとゴール局面がバスケットゴールになるような流れになっているようである。
- ・ 限られたスペースをうまく活用しながら、ボールゲームの楽しさを味わわせようとするトノ先生の姿勢が随所に見られた。
- ・ 日本で流行りのゲーム理論を用いたスペース学習やドリルゲーム、タスクゲームといった明確に学習課題が見える授業とはなっていなかった。しかし、ゴールマンの工夫などその一端は確認することができた。

4. 最後に

HIDUP BARU 校のトノ先生との出会いは、赴任 1 年目の本校運動会であった。本校児童生徒の少人数をカバーするため、国際交流の一環で例年、隣にある HIDUP BARU 校には運動会に参加していただいていた。その担当者として打ち合わせ等を重ねたのが彼であった。赴任 2 年目には、残念ながら運動会での交流はなくなってしまっており、今回 2 年ぶりでの再会となった。そんな中でも、快く今回の授業参観とヒアリングを引き受けてくれた。授業の後、トノ先生と授業について話をする機会を得た。こちらの質問に対して真摯に答えてくれたり、感じた改善点を話すと素直に「次、試してみる」という反応を示してくれたり、インドネシアで非常に心を動かされるひと時を過ごすことができた。

確かに施設面では、日本の何十分の一のレベルの教具しかない、思いっきり走る運動場も体育館もない中で、いかに子どもたちの体力を引き上げていくか、運動する楽しさを味わわせていくかを考えた授業を見せてくれた。制限された中だからこそ出てくる工夫があるということを実感した。例えば、トノ先生以外にも日本の体育科教育を知りたいと遠くマランから私の授業を見学したり、日本のカリキュラムについてヒアリングしたりする学生との出会いもあった。日本とインドネシア、場所や文化は違えど、子どもたちに運動の喜びを味わわせてあげたいと熱い思いを持つ学生や教師の存在に巡り合えた。その幸せをかみしめながら、帰国後の自分の体育授業をしっかりと見つめ、彼らに負けない情熱をもって子どもたちと体育授業を作り上げていく決意を固めることができた。トノ先生をはじめ、多くの方の協力でこの最終報告書をまとめることができた。大変お世話になりました。ありがとうございました。